Weekly VOL.439
河北ウイークリーせんだい 発行●河北新報社

Index 2016.6.9

5▶8 トピックス
10 行く旅知るナビ（東根市）
11 レジャー
13 キッズ
14 元気!健康!
15 スポーツ（仙台89ERS）
16▶17 グルメ
18 酔粋駅近

菅野 庸先生
宮城県生まれ。東北大学医学部精神神経科医員を経て、医療法人菅野愛生会緑ヶ丘病院に勤務。2007年、医療法人菅野愛生会古川緑ヶ丘病院院長（現:こころのホスピタル・古川グリーンヒルズ）に就任。

MMIX Lab 代表 村上 タカシ先生
熊本県八代市生まれ。美術家、国立大学法人宮城教育大学准教授、一般社団法人MMIX Lab（ミックスラボ）代表、一般社団法人アート・インクルージョン理事、宮城県文化芸術振興審議会委員、ほか。

医療法人菅野愛生会
こころのホスピタル・古川グリーンヒルズ
宮城県認知症疾患医療センター
6月11日㊏祝完成 記念対談

～院長ごあいさつ～

平素は、格別のお引き立て、ならびにご厚情を賜り、心よりお礼申し上げます。
かねてより、大崎市古川西館において建替え工事を進めておりました古川緑ケ丘病院の建物が、各位の日頃のご協力のおかげをもちまして無事竣工にいたりました。
リニューアルに先立ち、病院名を「こころのホスピタル・古川グリーンヒルズ」とすでに変更し、親しみやすい名称にさせていただいております。
これもひとえに、皆さま方の日頃のご支援とご協力の賜物と深く感謝を申し上げます。
つきましては、スタッフ一同心を新たに、地域の皆様に信頼される病院づくりに邁進してまいりますので、なお一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

病院らしくない病院を目指してリニューアル

――新病院の竣工おめでとうございます。今回、約50年続いた病院と建物を新しくされた理由を教えてください。

菅野庸先生（以下、敬称略）／昭和37年に建設した「古川緑ケ丘病院」は建物も古くなり、東日本大震災によって一部修復工事でカバーしきれない損傷を受け、病院開設50周年を機に全面的に建て替えることを決めました。また、精神科専門病院はどうしても暗く怖いイメージがあります。そこで建物と同時に名称も変えることで以前のイメージを払しょくし、気軽に受診できる明るく楽しい病院を作ろうと、未来志向で取り組みました。

――新しくなった病院の構成やリニューアルのポイントを教えてください。

菅野／目指したのは、「病院らしくない病院」です。高級感を目指すのではなく、リゾートホテルの雰囲気をイメージして、外観の色の選定から始めました。病棟は、ワンフロア60床を4層として最大240床になります。1階は外来棟、2階～5階は病棟です。フロアの中央には光庭を設け、スタッフステーションは、看護師の意見を採り入れて開放的な雰囲気にしています。病棟は、2階が「海」、3階が「星」、4階が「宙（そら）」、5階が「月」と名付けました。この名称は全職員に公募して決めました。

病院概要
医療法人菅野愛生会
こころのホスピタル・古川グリーンヒルズ
宮城県認知症疾患医療センター
●診療科目／精神科、児童精神科、内科
●病床数／240床
●受付時間／月～金曜 8:30～11:30、13:30～15:30、土曜 8:30～11:30
●休診日／日曜・祝日
※初診の方は、月曜～金曜までの午前の予約制となります。再診の方も予約が必要です。予約なしでも受付できますが、予約優先となります。

〒989-6156 宮城県大崎市古川西館3-6-60 TEL:0229-22-1190 FAX:0229-24-2521 http://kanno-hospital.jp/

全国でも希少な試み『アート×ホスピタル』

――そして、全国でもまれな『アート×ホスピタル プロジェクト』に着手されたことも話題になっていますね。

菅野／『病院らしくない病院』『また来たいと思っていただける病院』という理想を実現するために、さまざまな試みを採り入れています。児童精神科に通う児童の方が待ち時間を楽しく過ごせるように待合室にロボットのPepper君を配置したのも例です。またアートを採り入れて、患者さんに安らぎと癒しをと考えて企画したのが『アート×ホスピタル プロジェクト』です。病棟のマークの原案や外観の色などは私が自ら考えて選定しましたが、単にアートがある空間ではなく、「心のゆとりをもたらす療養生活ができる空間」を作るために、専門家にお願いすることにしました。そこで、美術家で癒しの空間をテーマに活動されているっしゃる村上タカシ先生に依頼しました。

――村上タカシ先生は、今回の『アート×ホスピタル プロジェクト』についてはどう思われましたか。

村上タカシ先生（以下、敬称略）／私はもともと版画が専門ですが、東京での学校美術館構想、仙台の壱弐参（いろは）横丁や文化横丁などをアートで再生させるプロジェクトなど、アートが街や社会の中に出る活動に取り組んできて、それを継続的に行なうMMIX Lab（ミックスラボ）を立ち上げました。東日本大震災以降はアートを使った防災、減災に向けてアクションを起こしています。そして、仮設住宅の壁に絵を描いたことで、住民の方の会話や交流が生まれる様子を見てきました。アートは、ひとりよがりの面があると思われがちですが、実は非常に多岐にわたる様々なアプローチができます。そのフィールドはギャラリーや美術館、学校もあり、今回は病院だったというわけです。今回、菅野院長からお話をいただいて大変光栄に思いました。院長のご実家、塩釜市にある、阿部仁史氏が建築された『菅野美術館』は以前からよく知っていましたし、『こころのホスピタル』のなかでアート展開が出来ることは、非常に素晴らしく面白い取り組みになると興味深く感じました。

菅野／私たちも、東日本大震災に直面して、面識のない方から多くのご支援をいただき、心のつながりの大切さをあらためて思い知らされ、「新しい病院＝癒しの空間」を作る活力になりました。それを患者さんに還元することがご支援への恩返しになると考えました。もともと精神科専門治療の一環として芸術療法がありますし、アートのある空間での治療がいい効果を生むということで村上先生と思いが一致しました。

村上／病院ならではの特性を考え、院長先生とお話しあわせをしながら、各フロアのテーマに合わせてオリジナルのアートを考えました。そして、妄想エンジン全開娘、パルコキノシタ、門脇篤、瀬戸麻文、沼田佳苗など海外でも活躍されている個性的なアーティストに依頼しました。壁に直接絵を描いている時にも患者さんが声をかけてくれたり、反応がありましたね。患者さんだけではなく、働くスタッフさんの癒しにもなればと考えました。

菅野／村上先生には入院患者さんが元気になり、刺激が少なく気持ちが穏やかになるアートをとお願いしました。絵がひとつあるだけで、物語が想像されたり、昔を思い出したり、会話のきっかけになるなどの影響があり、患者さんとのコミュニケーションをとりつつ治療につなげていけるようにと思っています。おかげさまで入院がしやすくなった、外来の患者さんが待ち時間が楽しく過ごせるようになった、という声をいただいています。

東日本大震災の経験を地元に、治療に活かす

――おふたりとも、熊本地震の支援にも取り組んでいらっしゃるということですが。

菅野／宮城県から依頼されてDPAT（災害派遣精神医療チーム）として、宮城県の民間精神科病院においていち早く熊本に出向きました。「東日本大震災でいただいた恩は、遠慮なく十倍返しにしましょう」という気持ちで取り組んでいます。

――今後の展望を教えてください。

村上／熊本県人として熊本を長期的に支援していきます。またアート・インクルージョンというプロジェクトで障がいのあるなしなどに関わらず、アートをテーマとした福祉作業所の運営にも関わっていますが、そのような活動も広げていきたいと思っています。

菅野／当病院の宮城県認知症疾患センターは、今年3月、県北の認知症の相談を受ける中心的存在として指定を受けました。また、外来治療では一般外来と別に夜間救急の入口を設け、今後通常の病院が診療していない時間にも対応できる体制にして参ります。また、宮城県でも少ない児童精神科の外来を開設していますし、摂食障害については外来治療から入院治療まで行なっています。地域医療相談室には、精神保健福祉士という国家資格をもつスタッフが常駐していますので、お気軽にご相談ください。
今後は、グループホームや地域での就労支援施設、デイケアと外来専門のクリニックを作るなど、少しでも精神科を受診しやすい環境を作りたいと思っています。そして、患者さんの人生そのものを理解して治療する「全人的医療」を極めていきたいですね。「アート×ホスピタル プロジェクト」は、その第一歩だと思っています。

村上／私は生まれも育ちも熊本で、いてもたってもいられず、すぐに支援に向かいNPOで緊急支援の熊本ベースキャンプを作りました。震災には段階があり、ライフライン、衣食住が整ってくると、次に心の豊かさ、ゆとりが必要になり、自然とアートや歌、人とのつながりを欲するようになることが経験を通してわかりました。熊本はまだアート活動の段階ではありませんが、いずれアートを通じた心の支援を考えています。

菅野／私も数年前に熊本城を訪ねており、人ごとではない気持ちです。震災つながりで交流も生まれつつありますし、宮城での経験を生かして、各専門家チームとも連携をとりながら、熊本の再生につながる活動に取り組んでいきたいと思っています。